

写真家―震災への視点

未曾有の災害をもたらした東日本大震災発生から半年、地震後の大津波被害に加えて福島第一原発事故による放射能汚染も発生した。この事態に写真家は何を考え、どう行動したのか。JPS 会員 7 人の写真家が、それぞれの視点による想いを込めた 1 枚の写真とエッセイで伝えます。

生への絆

穴戸清孝（宮城県仙台市在住）

2011 年 3 月 11 日。仕事から仙台市内の自宅に戻り、コーヒーで一息つこうとした瞬間、強い揺れを感じた。急いで外に飛び出すと、玄関脇にある 4 メートルの紅葉がゆさゆさと大きく揺れている。家の中に戻ると、電気は止まり、食器は割れ、本は雪崩のように崩れ落ちていた。情報を得ようと車のラジオをつけ「荒浜で 200 人の遺体」と聞く。それが津波によるものとは想像できず、何が起きたのか、漠然とした不安ばかりが募った。

東北の 3 月はまだ寒い。何度も襲う断続的な余震に怯えながら、明るいうちに夜の準備を整えようと、蠟燭やラジオ、懐中電灯、ストーブ、カセットコンロなどをかき集める。深夜、心配していた家内が山形から戻り、簡単な夕食をとった。

翌日からおよそ 1 ヶ月間、100 万人以上が住む仙台は都市機能の多くを失った。電気やガス、水道に加えて、物流が止まり、帽子やマスクを身につけた人たちが、わずかに開いている店を見つけては並び、数時間かけて食料を買い求めた。県庁のそばには、県外に避難しようとする人たちがバスを待って長い列を作り、多くの外国人が去っていった。ガソリンは 10 時間近く並ばなければ手に入らない状態が続き、高齢の母をもつ私は、家内と話し合い、いざという時に皆で逃げられるよう、一台の車のガソリンは温存しておこうと決めた。水道は 1 ヶ月半ほど止まり、庭の雪を浴槽に貯めて食器洗いやトイレに使った。

震災から 4 日後、タクシーで沿岸部に向かった。自己責任を告げて閑上地区に入ると、複数の遺体が目に入る。一時期を除いて生まれてからずっと仙台で暮らし、東北の地で仕事をしていれば、ほとんどの沿岸部に知り合

いや多くの思い出がある。何ともいえない虚しさで胸が詰まり、自衛隊員が遺体を丁寧に毛布で包んで運ぶ様子を離れたところから撮影することしかできなかった。

ガソリンが何とか手に入るようになってからは、記録することが写真家に与えられた使命だと考え、何度も被災地に向かった。癌を患って以来、自浄作用が落ちている目を防護するため、ゴーグルとマスクを付けて現場へ向かう。大量の瓦礫や泥に浸かった建物にレンズを向けながら、そこで生きてきた人たちの暮らしを思わずにはいられなかった。

知り合いの安否確認に胃を痛め、九死に一生を得て再会できた喜びに涙し、その震災のショックが抜けない 4 月、姉を癌で亡くした。57 年間生きてきて、これほど多くの生と死が自分の身近に存在したことはなかった。海岸沿いの道路を走りながら、自分に何ができるのか、何度も自問し、答えは今も出ていない。けれども、被災地の写真家として、亡くなった人々の無念や遺された人々の深い悲しみに心を寄せて、東北が復興する過程を記録していきたいと思う。



長い夜が終わり、朝陽が射し込む。（2011 年 5 月 12 日、宮城県女川町）
撮影：穴戸清孝



旧釜石商業高校の避難所で支援物資のカップラーメンを食べる子ども
(2011年3月18日) 撮影：和田直樹

震災発生一週間後の釜石市、大槌町を歩き、撮る

和田直樹（東京都練馬区在住）

『3・11』。後世、全ての日本人が痛みとして記憶に留めることになるだろう災害の実像を捉え、記録に留めるべきだ。機材を車に積み込み、3月16日、私はせき立てられるようにして東京から現地に向かった。高速道路の通行止めやガソリン不足を考慮して都内から新潟、新潟からフェリーで秋田に上陸し、仙人峠道路を越えて岩手県釜石市街に入る。そこには信号機は消え、交差点には警官が立ち、統制下のような異様な光景が広がる。

JR釜石駅付近に車を止め、市役所まで徒歩で向かった。商店街の店舗一階には津波で押し流された瓦礫や車がめちゃくちゃに入り込み、鉄筋の建造物はかろうじて形を留めているが、木造家屋は軒並み倒壊している。しかも臭いが強烈だ。魚の腐敗臭と重油の臭いが混ざったような独特な悪臭が鼻を突く。見れば、津波が運んだ湾内のヘドロが、アスファルトの道路にびっしりと堆積している。これが臭いの元だ。目につくのは、そこら中に転がる自動車だ。釜石港にかかる橋には津波で流され欄干に引っかかり、布のように屈曲した車体がいくつも見える。

生々しい被災現場を前に胸がふさがれる思いがした一方、地味らしいコミュニティの力強さに救われた。避難所となった旧釜石商業高校を訪ねると、町内会と釜石湾漁業協同組合、2つの組織が力を合わせ、被災生活を取り切ろうと活動していた。被災直後には、炊事に必要なプロパンガスのボンベをみんなで倒壊家屋から収集。廃材で焚き火を熾し、救援物資の運搬、仕分けも迅速に行

っている。避難者300人の食事の準備は女性たちの出番だ。食事時には避難所以外の人々まで押し掛けるから、多い時には1日180Kgの米を炊いたという。地域社会が崩壊した東京には望むべくもない生きる力が避難所に漲っている。夜、避難所の片隅に泊めてもらった。消灯は午後9時。子どもたちが笑ひ、明るさのあった昼間の光景は幻のように消えた。避難所の夜は厳しい。寝袋に潜り込むと、そこかしこでせき込む声、鼻をすする音がすることに気付いた。この寒空の下、狭い体育館に300人が身を寄せ合うのだから風邪が蔓延して当然だ。ようやく眠りかけたそのとき、ゴォーという地鳴り。続いて激しい余震が始まった。体育館の天井の照明が大きく前後左右に揺れ、赤ちゃんの泣き声、不安げに話す人々の声。幾晩も同じことが続いているのだろう。静かな夜にはどうしても被災の恐怖と現実が心に重くのしかかるに違いない。

翌日は釜石から国道45号線を抜けて、岩手県大槌町へ。大槌町の市街地を一望しようと城山に登った。市街地全てが瓦礫の山に覆われている。津波の後、火災にも見舞われ、倒壊したビルに焦げた跡まである。まるで爆撃を受けた戦地だ。異様に静かで人影もない。ときおり海からの強い風で建物のトタン屋根が煽られ軋む。この町に平和な人々の営みがあったのか。想像すらできなかった。

これから先、被災者同様、全ての日本国民は、いまは見えない「目標」を探しだし、長期に亘って忍耐と努力を求められることになるだろう。2011年3月11日。日本にとって大きな転換期になるはずだ。新たな地平が切り拓かれることを祈り、眼下の光景にシャッターを押す。

被災地からのメッセージ

細田満夫（宮城県蔵王町在住）

地の底から突き上げられるような強烈な揺れ。地鳴りとともに地上の景色は歪み、のたうち、路面に亀裂が走った。マグニチュード（M）9.0、最大震度7を計測した長い揺れが収まった時、東北の太平洋沿岸を巨大津波が襲うなど全く想像できなかった。

「3.11 東日本大震災」から5カ月が過ぎた。悪魔の所業としか思えない爪跡は、いまだに被災地から消えることなく、人々の心の奥底にも深い傷となって残る。

自らも被災した。住居は海岸から遠く離れた蔵王連峰のふもとにある。津波の被害こそ免れたが、家屋は半壊状態。家の中の棚という棚からすべての物品が崩れ落ちた。カメラの防湿ケースからは機材が飛び出し、使用不能になったものもある。「被災地へ取材に行かなければ」。焦燥にも似た気持ちは、身の置かれている状況が許してくれなかった。歯がゆさ、もどかしさだけが募った。

極端な品不足に陥ったガソリンをやっとの思いで入手し、被災地の宮城県石巻市へ取材に向かったのは震災から約2週間後だった。津波の直撃を受けた東日本有数の港湾都市は、がれきの山と折り重なった車両や打ち上げられた船舶で埋め尽くされていた。鼻を突く異臭、舞う粉塵。原形をとどめない自宅周辺で思い出の品を探す人、がれきの間を行き交う人々の表情は疲弊し、レンズを向

けることに強いためらいを感じた。長く報道の現場に身を置き、自然災害も数多く取材してきた。しかし千年に一度とも言われる未曾有の大災害の現状は、想像をはるかに超えていた。石巻市の死者、行方不明者は4,000人を超え、被災した全自治体の中では最多の犠牲者を出した。被災地に居住する写真家として何ができるのか。何のために写真を撮るのか。単なる記録者としての行為なのか。自問自答を繰り返しながら、ほかの被災地の取材も続けた。しかし、自分ができることは被災地のルポだけだろうか。ほかにもあるのではないか。その考えは終始付きまとった。

凍てつく寒さを克服し、やがて来る再生の春を待つ。東北に居住する人に共通した春を待ちこがれる思い。これは被災から復興への道のりと同じではないのか。東北人の心の原風景ともいえる、厳しくも美しい自然の姿を「宮城／東北からのメッセージ」として発信することが、遺族や厳しい状況下で避難生活を送る8万人の方たちへの励ましになりはしないだろうか。絶望の淵から這い上がろうとしている同胞へ直接、手を差し伸べることはできなくても、何がしかの一助になれたらそれでいい。東北人の血を引く一人の写真家として、ようやくその答えにたどり着いた。

写真展「FOREST OF MIYAGI」は11月4日から10日まで、フレームマンギンザサロン（中央区銀座5-1）で開催を予定している。



思い出の品は何も見つからなかった

（2011年3月28日、宮城県石巻市門脇地区） 撮影：細田満夫



ガレキの街となったなかで屋台の居酒屋が開店されていた
(2011年8月13日、岩手県大槌町) 撮影：橋本紘二

ふるさとはあきらめない

橋本紘二（新潟県十日町市在住）

東北の被災地に行ったのは15日も経ってからだった。あまり報道されなかったが、実は、3月11日の翌日の12日早朝に長野県北部の栄村を震源地とする震度6の地震があり、栄村から山ひとつ越えた、私が3年前に移住した新潟県十日町市松之山も家が倒壊するなどの多大な被害を受けた。

15日も遅れてしまったのは、隣近所や友人の家の後片付け手伝いをしていたこともあるが、正直なところは連日のテレビや新聞の報道に驚き、そんな悲惨な現場を見るのは辛いので行きたくないという気持ちがあった。また、私個人が現場に入ったとしても情報や機動力のあるテレビ局や新聞社に太刀打ちできるものではないと思っていた。しかし、カメラマンの業なのか、世紀の大災害の現場に立ちたい、記録したいという気持ちも強かった。

車に寝泊まりして岩手県から福島県まで走り回った。その後は、福島第一原発の被災地や自宅隣村の長野県栄村を撮り続けてきた。福島県飯舘村では、避難するため、飼っていた牛を殺処分しなければならなくなった酪農家の奥さんが「カンベンシテネ、カンベンシテネ」と理不尽な別れになったことに泣きながら牛に語りかける姿を

撮るのは辛かった。東京電力の事故対策の遅さや、責任感のないずさんな対応や情報隠しに翻弄された農民たちはかわいそうだった。私も東京電力にははげしい怒りがわきあがり、悔し涙が出た。長野県栄村の倒壊した家には「我ら相寄り村を成し」という大きな幕をかかげていた。東北人が強いのは、村人みんなが助け合って生きてきたからなのだ。

私が撮った写真は、写真ルポルタージュ『3.11 大震災・原発災害の記録』として農文協から出版できた。帯には「ふるさとはあきらめない」と書いた。

そして最近、初盆を迎えた被災地を回ってきた。被災地のガレキはかなり片付けられていた。岩手県大槌町では、ガレキの街となったなかで屋台の居酒屋が開店されていた。電気がまだ来ないガソリンスタンドでは自転車のようなもののペダルを踏み回してポンプアップして車にガソリンを入れていた。また、お盆に都会から帰ってきた息子や孫たちが、今はおだやかになった海を黙って見つめていた

フリーのカメラマンは、情報と機動力のあるテレビ局や新聞社にはかなわないが、現場に行ってみると、さまざまな出来事があり、出会いに遭遇できた。やはり、現場に立ち、自分の目と心で見つめることの大切さをつくづく思い知らされた撮影行であった。

秘匿汚染

森住 卓（東京都日野市在住）

つけっぱなしの NHK ラジオから緊急地震速報。しばらくして福島第一原発で津波の影響で緊急炉心冷却が出来ないというニュースが飛び込んできた。

3月12日午前、放射線測定器、防護用のマスク、手袋、上着、寝袋、食糧を用意し、DAYS JAPAN 編集長・広河隆一氏とともに東北方面に出発した。私たち日本ビジュアルジャーナリスト協会（JVJA）のメンバーは一斉に動き出した。夜、福島県郡山市に到着。ホテルはどこも被災者で一杯だった。国道沿いの小さな宿を見つけた。そこも、いわき市から被曝を恐れ避難してきた人たちでロビーまで一杯だった。ホテルの主人の好意で相部屋を用意していただいた。3月13日早朝、JVJAの仲間と合流。福島第一原発のある双葉町を目指した。前日12日、一号機の水素爆発で避難地域は20Kmに拡大され、双葉町もその範囲に入っていた。私は1999年に起こった茨城県東海村 JOC 核事故の時に見た防護服を着て検問をしている警察官の姿を撮影したいと思っていた。双葉町に入っても検問はどこにもなかった。車内ではラジオのニュースをつけっぱなし。新たな事態にすぐに対応できるよう備えていた。緊張の連続だった。

町の中心部に入る手前で常磐線の陸橋が壊れて道を半分ふさいでいた。背の高い大型車両は通れなくなっていた。町の中心部に近づくと放射線量が高くなっていった。助手席に乗っている広河さんの計測器はガリガリガリと激しく鳴っている。そのうち振り切れてピーと警報音にかわる。測定レンジを10倍に上げてみてもすぐに警報音が鳴る。普段、物静かな広河さんも声を荒げている。

町中心部の町役場に続く道に「原子力郷土の発展豊かな未来」というアーチが我々を迎えてくれた。役場庁舎は原子力立地自治体のどこも同じような立派な建物だ。原発とともに栄えた町は一瞬にして全てのものを失ってしまった。正面玄関前の時計は地震発生時の2時46分を指したまま右に大きく傾いて止まっていた。まだ、職員が残っているかも知れないと思い正面玄関のドアを押したが開かなかった。避難した旨を伝える張り紙もなかった。我々が持ってきた三種類の計測器は最大1000マイクロシーベルト毎時まで測れる。それも振り切れてしまった。これまで世界の核汚染地で経験した事がここでは役立たない。桁違いの汚染だ。全身から血の気が引く思いがした。

双葉町役場から400メートルほど離れた双葉厚生病院の玄関前にはストレッチャーやベッドが転がり、内部に入ると1階の待合室にはベッドやシーツ、輸血用のビニールパイプなどが散乱していた。前日の12日に患者や職員が避難したのだった。避難の際に双葉高校で自衛隊

ヘリを待っていた患者3人が被曝した。

病院の玄関前で放射線測定器は役場庁舎前と同様振り切れてしまった。長時間滞在することは非常に危険だ。

我々はもと来た道を引き返した。我々と入れ違いで避難先から戻ってくる住民がいた。彼らの車を止め、「町の中には放射線量が高いので危険です」と知らせた。それでもビニールハウスの花に水をやるために戻ってきた農家の人や子どもを連れた家族が衣類を取りに来たという人などが町の中に入っていた。誰もが高い放射線が出ている事を知らなかった。



政府発表は「原発爆発」という表現は避けていたが、爆発音を聞いていた地元警察は素直に「爆発」という表現を使った（2011年3月15日、福島県伊達市月舘町布川）

撮影：森住 卓

私たちは近隣自治体に知らせると同時に、メディアに知らせるために緊急のプレスリリースを発表した。

15日夕方、宿泊先の三春町に戻る途中、買い物に立ち寄った伊達市月舘町布川（福島第一原発から58Km）で20マイクロシーベルト毎時（午後4時30分）を検出した。商店や近くの住民に高い放射線が検出されたことを伝え、子どもや妊婦は早く逃げてくださいと伝えた。政府は30キロ圏外の汚染についてはスピーディーで観測していたにもかかわらずデータを隠し続けていた。

16日避難所になっている田村市総合体育館に行った。「明日帰れると思って、お菓子和貴重品しか持って来なかった。ペットの犬をケージに入れたまま来てしまった。水もないので、もう死んでいるでしょう」と避難した女性を顔を見せた。チェルノブイリ原発事故の時に全員避難させられた原発から4Kmにある町ブリピャチの住民の話と重なってきた。避難民から名前と仕事を聞こうとしたが、原発の放射線管理の会社で働いているので名前は公表しないでと言われた。原発とともに発展してきた町の住民は未だに、原発の呪縛から解き放たれていなかった。

政府による避難指示は10Km、20Km、30Kmと日ごと広がり、住民への不安を大きくし、事故の規模を小さく見せようとする政府や電力会社の無責任な態度によって何も知らされない住民は被曝してしまった。

フォトジャーナリズムの立脚点

広河隆一（東京都世田谷区在住）

南仏のペルピニャン市で2011年8月末から9月初めにかけてVISAという世界最大のフォトジャーナリズム祭が行われた。街の歴史的建造物を用いた20以上もの写真展、毎晩2500人を集める巨大スライドショーに十万を超える人々が参加した。キヤノンが最大のスポンサーになっているが、DAYS JAPAN もナショナル・ジオグラフィック誌やパリマッチ誌とともにスポンサーとなっているほか、私はこの数年この大賞を選ぶ審査員にもなっている。

この催しの目玉の一つが「DAYS JAPAN が選んだ3・11震災と原発事故」の写真展だった。フランス文化大臣も訪れたこの展示の写真は、世界の著名紙誌の表紙や特集として扱われ、日本のフォトジャーナリストの底力を世界に示すことになった。もちろんこれは、写真を応募してくれたフリーランス、メディアの写真記者、フォトエージェンシーの人々が、信じられない大災害に直面した時の慟哭の深さが作品として表現された結果だろう。撮影されている被災者は「他人」ではなく、撮影者とどこかで「連なる人々」であり、例えば津波が押し寄せる写真は、そうした人々が今まさに飲み込まれている瞬間を記録していた。会場では写真が見えないほど混雑のなか、重い沈黙が漂っていたのは、そうした撮影者の撮影時の思いが人々に伝わったからだろう。

応募作品が津波の被害に集中したため、私は数点の原発事故写真を出展した。その撮影の様子は、同行した森住卓さんの報告を読んでほしい。このとき私たちは撮影を続けるべきか、危険を人々に知らせるべきかという選択を迫られた。

今まで50回に及ぶチェルノブイリ取材で持ち歩いた放射能測定器が、今回初めて振り切れてしまった。3月13日双葉町、福島第一原発から4Km 弱の場所だった。

政府や東電によって汚染を隠されていたため、安全と信じ込まされていた住民がそこにはいた。私たちは高濃度放射能の中で撮影を続けることなく、人々にその場所から逃げるようにと伝えて回ることを選んだ。それでよかったのだろうか。私はフォトジャーナリストという自分のアイデンティティを超えたもっと大きなアイデンティティを選ぶことを迫られた。それは人間というアイデンティティである。

フォトジャーナリストとしてできることがもったなかったわけではない。2011年8月に行われたJCJ（日

本ジャーナリスト協会）の講演で、私は次のような問いを人々に投げかけた。「もしあなたが自分をジャーナリストと考えるなら、事故の時何をすべきだっただろうか？」。私は「すぐに撮影に駆けつける」という答えを期待したのではない。福島第一原発事故では、真相を人々に知らすまいとする巨大な力に、メディアもジャーナリストも押しつぶされた。私たちにできたことは非常に小さく、数百人を現場から逃れるように動いただけだった。3月13日の福島からの中継で、私たちが何を見たのか日本と世界に向けて証言したことは、「巨大な力」がもくろみどおりに行くのを押しとどめるささやかな影響を与えたのではないかとと思っている。しかしジャーナリズムは、被曝しなくてもすんだはずの数万、数十万の人々、特に子どもたちを被曝から守ることができたはずだったのに、その力を発揮することはできなかった。

3月後半の2回目の訪問では、食料、介護用品、放射能測定器など救援物資を、福島県いわき市、南相馬市、宮城県南三陸町に配って回った。被災地を合計10回ほど取材し、また福島県では2度、チェルノブイリの経験を語る講演会を持った。そして5月半ばから私は、現地に放射能測定器を贈る運動を始めた。DAYSの募金とチェルノブイリ子ども基金関係の募金を合わせて6月から9月までに2500万円を集め、車、食品放射能測定器6台、ホールボディカウンターを1台寄贈した。こうした運動は、自分のフォトジャーナリストとしての活動を制限したには違いないが、これでいいと思っている。こうした時期に「自分は写真家だ」とか「自分は作家だ」とか主張し、他にしなければならぬことをしない言い訳にする人々がほとんどかもしれない。しかし私は、すべてに先んじてフォトジャーナリストの仕事があるとは考えていない。ただフォトジャーナリストという仕事が、人間の生死にかかわる深い基盤に強く結びついているというゆえにこそ、私は自分の仕事に強い誇りを抱いている。



福島第一原発から7 Km 地点の浪江町請戸で子どもと見られる遺体を運ぶ福島県警
(2011年4月14日) 撮影：広河隆一



青森県六ヶ所再処理工場を見渡す下北半島（2011年8月9日） 撮影：岩木 登

下北半島の暗雲

岩木 登（東京都大田区在住）

震災から5ヵ月が過ぎて、被災地は徐々にではあれ復興は始めているのに、これを逆転させ邪魔をしようとする愚かな人たちがいる。

僕と多くの仲間たちは、震災後すぐに東北支援東京写真家チーム「TSTST」を結成して6次にわたって現地派遣隊を組み、支援物資の配給、炊き出し、ガレキの撤去などできるかぎりの精力的な東北再建活動をおこなってきたつもりだ。仲間のひとは実際にはユンボを運転して漁港のサルベージ作業をおこなってきたし、ほかの仲間たちは漁港近くの被災した食堂の再建を支援し、開店にこぎつけたところもある。岩手県大船渡の写真スタジオの支援などもおこなってきた。TSTSTの支援メンバーは、全国におよび、写真家のみならず編集者、クリエイター、映画監督、会社員等種々雑多な110名をこえる。自分のわずかながらの身を削り時間をさき被災地の人たちと手を取りながら、共に東北を再建しようと努めてきたのだ。

だけど、漁港を再建しても、農業を再興しようとしても、すべてを無に帰するようなことを進めている愚かな人たちがいる。海に放射能をまき散らした人たち。情報を隠し国民をだまして、国土と国民をみすみすと汚染・被曝させてきた人たち。福島という東北のふるさとを奪い取ってきた人たち。彼らは何の反省もなくのうのうと

して闊歩し、また原発を押し進めようとしているのだ。

僕らは、原発を廃絶しないかぎり東北と日本の新たな再建などありえないと思いたち、被災地支援を進めると同時に、原発を稼働させないための活動にも取り組みはじめたのである。

写真は、青森県六ヶ所再処理工場を見渡す下北半島。国家石油備蓄基地が隣接しウィンドファーム（風力発電）がそれを取り囲んでいる。再処理工場は、試験段階でトラブルが頻発し、いまだ稼働すらできないでいる。それなのに、フクシマの事故処理すらなんら進展もないままにこれを稼働させようとしている。これが稼働すれば、プルトニウム、クリプトン等の放射性ガスを煙突から放出し、液体を海に毎日放出する。原子力村の人たちは、”煙突は高いから拡散される。海は広いからこれも拡散される”と言っている。なんと愚かな！これが強行されれば、美しい白神も、八甲田も下北も、そして日本も、お終いなのだ。原発廃絶なくして東北再建などありえない。絵に描いた餅に終わる。

多くの人たちが声を上げ始めている。そこにこそ希望がある。